氏　　名　河合（安藤）花恵（かわい あんどう はなえ）
学位（専攻分野）　博　士（教育学）
学位記番号　教　博　第 55 号
学位授与の日付　平成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　教育学研究科教育科学専攻
学位論文題目　演劇俳優の熟達化に関する認知心理学的研究

論文調査委員　（主査）教授 子安増生　教授 吉川左紀子　助教授 楠見　孝

論文内容の要旨

本論文は，演劇俳優の演技の熟達化の過程を，俳優に対する実験および調査を通して明らかにしようとしたものであり，全部で8章から構成されている。

第1章では，これまでに演劇俳優が研究対象として扱われてきた心理学の研究として，①演劇俳優の演技を材料として使用した研究，②演技論に関する文献研究，③熟達した俳優の記憶方略を調べた研究の3種類を挙げ，本研究の特徴が1）演劇俳優に特有の能力および心理を明らかにしていこうとするものであること，2）多数の俳優に対する調査や実験によって俳優一般に通じる特色を実証的に明らかにしていくこと，3）脚本を読んでから実際に演技をするまでの過程全体を通して俳優の能力を幅広く扱うこと，の3点にあると規定し，特に，演技の過程を「脚本を読む段階」，「演技計画の段階」，「演技遂行の段階」の3つに分け，これら3段階における「役」，「俳優」，「観客」の3視点の成立という観点からその熟達化を検討するプランが示された。

第2章では，研究1として，3つの段階全体を通して，脚本理解，演技計画，演技遂行の熟達差を調べるために，初心者（演劇経験1年未満），中間（同1～5年），準熟達者（同5年以上）に対して実験を行った。その結果，脚本理解の段階に熟達差は見出せないが，演技計画の段階において準熟達者の消費時間が長く多様性があること，演技遂行の段階において準熟達者が演技計画通りに遂行できることが示された。

第3章の研究2では，演劇未経験者と準熟達者の自然表情と演技表情とを，味覚という題材を用いて比較した。口の中に味覚刺激を与えることで自然に喚起される表情では俳優の方が素人よりも優れているわけではないが，演技表情では，両群の差が見られた。また，研究3では，痛みがある「ふり」の演技を初心者，中間，準熟達者で比較した。初心者は大げさで不自然な演技になりやすいが，準熟達者は自然で高く評価される演技を行うことが示された。

第4章の研究4では，演技の初心者，中間，準熟達者が脚本を読む際に，役，俳優，観客の3つの視点に立つ度合いに差が見られるかどうかを調べるために質問紙調査を行い，脚本を読む段階での熟達差は見出せなかった。

第5章では，演技計画の段階の熟達差を調べる2つの研究を行った。研究5では，役，俳優，観客の3視点に立つ度合いの熟達差を調べるために質問紙調査を行った。続く研究6では，初心者，中間，準熟達者に対しある脚本に基づいて演技計画を立てさせ，その発言を分析した。この2つの研究から，熟達とともに自分の役から離れて全体を考えたり，役の視点だけでなく俳優の視点や観客の視点にも立ったりするようになることが示され，そのことが準熟達者において計画時間が長くなり演技計画が多様になることの原因であることが示唆された。

第6章の研究7では，初心者，中間，準熟達者が遂行した演技をビデオ撮影し，その映像を別の準熟達者に見せ，演技が3視点にどのように立って行われているかを評定させた。その結果，初心者は演技中3視点すべてに立つことができないこと，中間群は3視点すべてにおいてまだ不適切な立ち方をすること，準熟達者はすべての視点に適切に立っていることが示された。

第7章の予備調査および研究8では，演劇未経験者，初心者，中間，準熟達者にさまざまな俳優の演技を見せ，その評価

をおこなわせた。その結果，演劇経験のない者や演技経験が短い者は，声，表情，体の動きといった演技の表面的な部分だけを評価基準としているのに対し，準熟達者は，表面的な部分だけでなく，役としてリアルに存在しているかなどの感性的な部分を重視して評価していることが明らかになった。研究９では，演技経験はないが観劇経験の豊富な者を対象として研究８と同様の手続で調査を行い，その演技評価能力が演劇経験者よりも未経験者に近いことを示した。

最後に第８章では，前章までの研究をふまえ，演技の熟達化過程全体のモデル化をおこなった。

論文審査の結果の要旨

演劇俳優は演技力をどのように熟達させていくのか。自身の６年余りの演劇経験をもとに，論者はこの問題について演劇俳優を対象とする心理学的実験と質問紙法による調査を用いて，認知心理学的に解明しようとした。その際，演技の過程を「脚本を読む段階」「演技計画の段階」「演技遂行の段階」の３つに分け，これら３段階における「役」「俳優」「観客」の３視点の成立という観点から熟達化を検討する研究プランが最初に提示された。そもそも演劇の熟達の心理学的研究というもの自体，先行研究が大変少ない領域であるが，このような分析の枠組みを用いたことはオリジナリティが高いと評価できる。

演技遂行の熟達差を調べるために，論者は俳優をその経験年数に応じて，演技の初心者（演劇経験１年未満），中間（同１～５年），準熟達者（同５年以上）に分けて実験を行った。なお，「準熟達者」という言葉は，熟達研究では多くの分野で「熟達者」を10年以上の経験者と定義しており，それに満たない経験者に対して用いられているものである。

本論文では，全部で９つの研究が示された。

研究１では，脚本理解，演技計画，演技遂行のそれぞれの段階の熟達差を調べ，脚本理解の段階では熟達差は見出せないが，演技計画の段階において準熟達者の思考時間が長く計画内容に多様性があること，演技遂行の段階において準熟達者が演技計画通りに遂行できることが示された。

研究２では，味覚という題材を用い，口の中に味覚刺激を与えることで自然に喚起される表情では演技の経験者と未経験者に差はないが，演技表情では演技経験者の方がうまく示せた。また，研究３では，痛みがある「ふり」の演技を比較し，初心者は大げさで不自然な演技になりやすいが，準熟達者は自然で高く評価される演技を行うことが示された。

研究４以後は，役・俳優・観客の３視点を導入した検討が行われた。

研究４では，脚本を読む際に，役・俳優・観客の３つの視点に立つ度合いに差が見られるかどうかを調べるために質問紙調査を行い，脚本を読む段階での熟達差は見られないことを示した。演技計画の段階の熟達差を調べた研究５と研究６では，ある脚本に基づいて演技計画を立てさせ，その発言の分析から，熟達とともに役の視点だけでなく俳優の視点や観客の視点にも立てるようになり，そのことが準熟達者において計画時間が長くなり演技計画が多様になることの原因であることが示唆された。研究７では，初心者，中間，準熟達者の演技をビデオ撮影し，その映像を別の準熟達者に評定させ，熟達と共に３視点すべてに立つことができるようになっていく様子が示された。研究８では，演劇未経験者，初心者，中間，準熟達者にさまざまな俳優の演技を見せ，その評価を行わせた。その結果，演劇経験のない者や演技経験が短い者は，声，表情，体の動きといった演技の表面的な部分だけを評価基準としているのに対し，準熟達者は，役としてリアルに存在しているかなどの感性的な部分を重視して評価していることが明らかになった。研究９では，演技経験はないが観劇経験の豊富な者を対象としたが，その演技評価能力が演劇経験者よりもむしろ未経験者に近いことを示した。以上は，いずれもユニークな研究結果である。

他方，本研究に対して，

１）熟達研究への寄与が必ずしも十分明示的に述べられていないこと，

２）熟達を年数のみで定義するのは不十分であること，

３）統計的分析の一部に幾つか不十分な点があること，

などの問題点を指摘しうる。しかしながら，これらの点は重大な瑕疵ではなく，本研究の結果は教育認知心理学の発展にとって重要な知見を生み出しており，高く評価すべきものである。

よって本論文は，博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成18年２月９日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。